

# 支部だより

中国四国支部からのたより

## 1. はじめに

一昨年、徳島で開催されました第47回日本生物物理学会年会におきましては、多くの皆様方にご参加いただき盛会のうちに無事終了することができました。中国四国支部の会員一同、心より感謝申し上げます。行き届きの点も多々あったかと存じますが何卒ご容赦くださいますようお願いいたします。

日本生物物理学会中国四国支部は平成20年(2008年)に活動を開始し、今年で発足3年目に入りました。昨年、徳島で年会が開催されたこともあり、今年ようやく第2回の支部大会が、去る平成22年5月8日、9日に愛媛県の松山大学薬学部にて開催されました(図1)。

## 2. 第2回中国四国支部大会

本会には、香川(徳島文理大香川薬)、徳島(徳島大院ソシオ、ヘルスバイオ、疾患ゲノム、徳島文理徳島薬)、高知(高知工専)、愛媛(愛媛大院理工、無細胞研、松山大薬)、兵庫(兵庫県立大)岡山(岡山大

理、川崎医大)、広島(広島大院理、県立広島大)、山口(山口大農)の各県(各組織)から55名の研究者が参加し(学生を含む)、31題の講演が2日間に渡って行われました(図2)。

第2回支部大会において前大会から大きく変わった点は、会期が1日から2日間となったことです。これに伴って、十分な講演時間が確保されたのに加え、各講演後に討論の時間も設けられることとなりました。余裕のあるスケジュールとなったことを受けてか、参加者の研究分野は多様性に富んでいるにもかかわらず、多くの講演でプレゼンテーションの終了後に専門分野の枠を超えた白熱した討論が行われていたように見受けられました。座長をされていた香川弘昭先生(岡山大理)がフロアの参加者に向かって「素人からの質問が本質を突いていることが多い。だから、分野外の人もどんどん質問を下さい。」と檄を飛ばしていたことも、会場内の雰囲気活性化に拍車をかけていたように思います。また、この支部大会では講演者が桐野豊支部長(徳島文理大香川薬)から工業高等専門学校(高専)の学生までと非常に幅広く、誰もが参加して発表、討論できる雰囲気もその魅力の1つとなっています。決して多くはない参加者が全員一堂に会して行われる本支部大会では、参加者同士の距離がとても近く感じられるがゆえに、密な学術交流を図ることができる場となっているのだと思います。このような会の雰囲気は、年会のような全国規模の学会ではなかなか味



図1 松山大学薬学部の正面玄関前にて

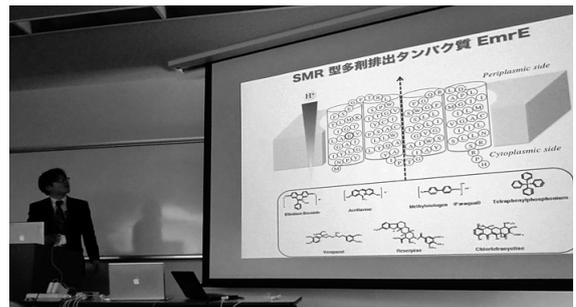


図2 会場内のお様子

わえず、第2回にして早くも支部大会の開催意義が十分に発揮されはじめたと感じました。

発表終了後には、中国四国支部総会が執り行われ、いくつかの議題について討議がなされると共に、次回の大会開催地（広島）が決定しました。その後、松山大学の生協食堂に移動し、恒例の懇親会が催されました。講演会参加者のほとんどが懇親会にも足を運ばれ、盛況な会となりました（図3）。年会などの大掛かりな懇親会ではご高名な先生方にはなかなか近づくことができませんが、本懇親会では学部生や大学院生が桐野豊支部長や加茂直樹大会実行委員長（松山大薬）と和やかに懇談する場面も見受けられ、「アットホームな雰囲気の中で密に交流できる」という支部大会の長所をここでも再確認することができました。

### 3. おわりに

次回（2011年）の中国四国支部大会は、発足以来はじめて瀬戸内海を渡り、本州（広島）で開催されます。これからも新たな出会いと、交流の場としてこの支部大会がますます発展していくことを願ってやみません。今後とも、支部会員の皆様、生物物理学会のご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

徳島大学疾患ゲノム研究センター 山本武範



桐野豊支部長ご挨拶



図3 懇親会のようす